

コミュニティ心理学の視点から見たソーシャルワークの実際とは ー先行研究に関する内容分析手法の結果からの考察ー

○ ケアプランセンターミライ 実践研究所 主任研究員 杉田 貴行 (008282)

キーワード：コミュニティ心理学、ソーシャルワーク、内容分析手法

1. 研究目的

利用者は時として対人援助専門職の手の届かない、支援ネットワークの外にいる場合が認められる。また支援においては、地域の状況に応じた対人援助専門職とのむすびつきが求められる。社会生活上の困難な状態にある利用者への支援とは、対人援助専門職と地域社会のさまざまな人々との連携においてこそ成立する。本報告はソーシャルワーカー、カウンセラーなどの対人援助専門職が、危機介入、コンサルテーション、社会的支援とそのネットワーク形成、課題調査の手段など、ソーシャルワークの実際をコミュニティ心理学の視点から見た場合の、その具体的な内容に関して整理したものである。

2. 研究の視点および方法

本報告では、J-Stage の検索機能を用い「ソーシャルワーク AND コミュニティ心理学」という言葉で先行研究を全文検索し 25 件が該当した。そして、大会報告や書評などを除く 21 件の論文を対象とした。また、これ以外にも該当先行研究の参考文献などを手掛かりに 9 件の文献も対象に加え、計 30 件を対象とした。次に分析方法としては、Berelson や Krippendorff の内容分析等を参考に、内容分析手法にて、展開されているソーシャルワークの実際について、コミュニティ心理学の視点から言及した、先行研究の記述内容について記事を単位として整理した。なお分析対象の選定に当たっては、トライアングレーションとして、居宅介護支援事業所の他のケアマネージャーや介護職の意見も参考にした。さらに、30 件の先行研究の記述内容を文脈単位で整理した結果、コミュニティ心理学の視点からみた、地域におけるソーシャルワークの実践に直接言及していると思われる記述内容に関して整理し検討した。

3. 倫理的配慮

本研究は、公刊された論文をデータとして引用することにより調査を実施したものである。記事に関しては日本社会福祉学会研究倫理指針「学会発表」の規程を遵守した。

4. 研究結果

本報告は、すでに述べた 30 件の先行研究の先行研究の内容を分析したものであるが、ここではいくつかの具体例を紹介することとしたい。

例えば、上村(2008)は「エンパワメントとは、自ら（個人・集団・コミュニティ）が自力で力を獲得することであり、他者（個人・集団・コミュニティ）から力を与えてもらったり、他者に力を与えたりするものではない。あくまでも主体的に、自らの力を発見した

り力をつけ、伸ばすものである。他者（援助者）はそれを支援する役割であるとともに、当事者と援助者はともにエンパワメントを目指すパートナーである。ところで、同じエンパワメントを扱いながら、コミュニティ心理学では、エンパワメントをいうとき、個人よりも集団やコミュニティに力点を置いているように思われる」と主張している（文献 4、p.135-p.136 文献リストは当日配布資料に記載）。

花城(2002)は「バークレイ報告では、社会的ケア計画とカウンセリング（ケースワーク）を統合的に対応させるために CSW を基本的枠組みとして位置づけているが、M・ペインの場合は、CSW が社会的ケア計画を含み、カウンセリングとは分けて位置づけている。そして、ケアマネジメントは両者を結びつけるものであるとする。バークレイ報告の位置づけでいえば、コミュニティソーシャルワークに含まれる社会的ケア計画とカウンセリングに関して、ソーシャルワークの視点からケアマネジメントを展開していくことが想定されている。一方、ペインはケアマネジメントをキーコンセプトにして、直接的な支援（カウンセリング・治療的ソーシャルワーク）と間接的な支援（コミュニティソーシャルワークの社会的ケア計画）を展開していくという視点が見いだせる。両者の位置づけでは、キーコンセプトの相違がみられ、それはソーシャルワークとケアマネジメントの位置づけの違いによるものと思われる。いずれの場合にしても、ソーシャルワークの視点を大切にしながらコミュニティケアの推進を意図していると考えられる」と述べている（文献 32、p.115）。

5. 考察

本報告から、ソーシャルワークの実践においては、社会福祉学と心理学の両視点から支援することを学び、専門性を深めていく必要があることが示唆された。心理の知識を持つ福祉のスペシャリスト、心の通ったケアのできる対人援助専門職として、支援を受ける利用者の抱える問題の解決に向けて、パーソナリティや情緒など、人の心を学ぶ心理学と福祉制度や法律など、利用者を取り巻く環境を学ぶコミュニティ心理学の視点から、人間や社会を多面的に理解していく必要性が見て取れた。そして、ソーシャルワークでは、利用者が生活する場を拠点として、利用者と彼らを取り巻く環境を対象として一体的に援助を展開することが求められていることも確認された。

例えば、総合相談としてのソーシャルワークとは、利用者への聞き取りから支援を開始する。利用者本人の問題としてではなく、生活全体に焦点を当て、特定の問題のみを取り上げるのではなく、地域での生活に目を向け、地域がソーシャルワーク実践の場であることを認識することが大切であると考えられる。環境と本人の一体的支援を実践することにより、システムとして全体的変化を促す。コミュニティ心理学の視点でソーシャルワークを見た場合、利用者と社会資源の関係の結び方が類似していることも理解できた。ソーシャルワークでは利用者を社会資源（社会福祉施設・事業所、福祉制度、対人援助専門職など）を有効活用して支援し、関係機関との連絡・調整の役割を果たすことになる。本人と環境、地域との相互作用を促進することで、環境側にも変化をもたらす。ソーシャルワークにおける問題解決とは、本人と環境との良好な適合状態を形成することである。本人の生活の場で支援を展開した上で、人間や社会を理解することが重要であると認識された。